

「ジャポニスム2018」続報 4

本号では、9月下旬に開催された「ジャポニスム2018」の公演、映画事業を中心に報告致します。

1

目次

- | | |
|-----------------------------------|-----|
| 1. タニノクロウ演出「ダークマスター」公演 | 2~3 |
| 2. 野田秀樹演出「贋作 桜の森の満開の下」公演 | 4~5 |
| 3. 「日本映画の100年」開催記念・無声映画「雄呂血」上映会 | 5~6 |
| 4. 渡邊守章「繻子の靴」講演会 | 7 |
| 5. 木津潤平・宮城聰「Landscape Theatre」講演会 | 8 |
| 6. 宮城聰演出「レヴェラシオン」公演 | 9 |

① タニノクロウ演出「ダークマスター」公演

9月20日夕方、パリ北北西の郊外にある国立演劇センター・ジュヌヴィリエ劇場で、タニノクロウ演出による「ダークマスター」という劇が上演されました。

日常的なようでありながら非日常的な、いささか倒錯した世界で生きる人々を緻密に描く演出家タニノクロウさんの2作品、「ダークマスター」(20~24日)と「地獄谷温泉 無明ノ宿」(25~29日)が、今回「ジャポニスム2018」の一環として同劇場で上演されました。

実は、「地獄谷温泉 無明ノ宿」はパリ日本文化会館で2016年9月14~17日までパリで初上演されたのですが、それを見たジュヌヴィリエ劇場のダニエル・ジャンヌトー館長(当時は新館長に任命されたばかり)がタニノクロウさんの作品を大変気に入り、「ジャポニスム2018」の現代演劇シリーズの一環として是非同劇場で上演したいと強く要望したものでした。当館で初上演して後にフランスで人気が出た演出家は岡田利規さんや木ノ下歌舞伎(主宰:木ノ下裕一さん)など、少なくありません。



タニノクロウ演出「ダークマスター」の一場面

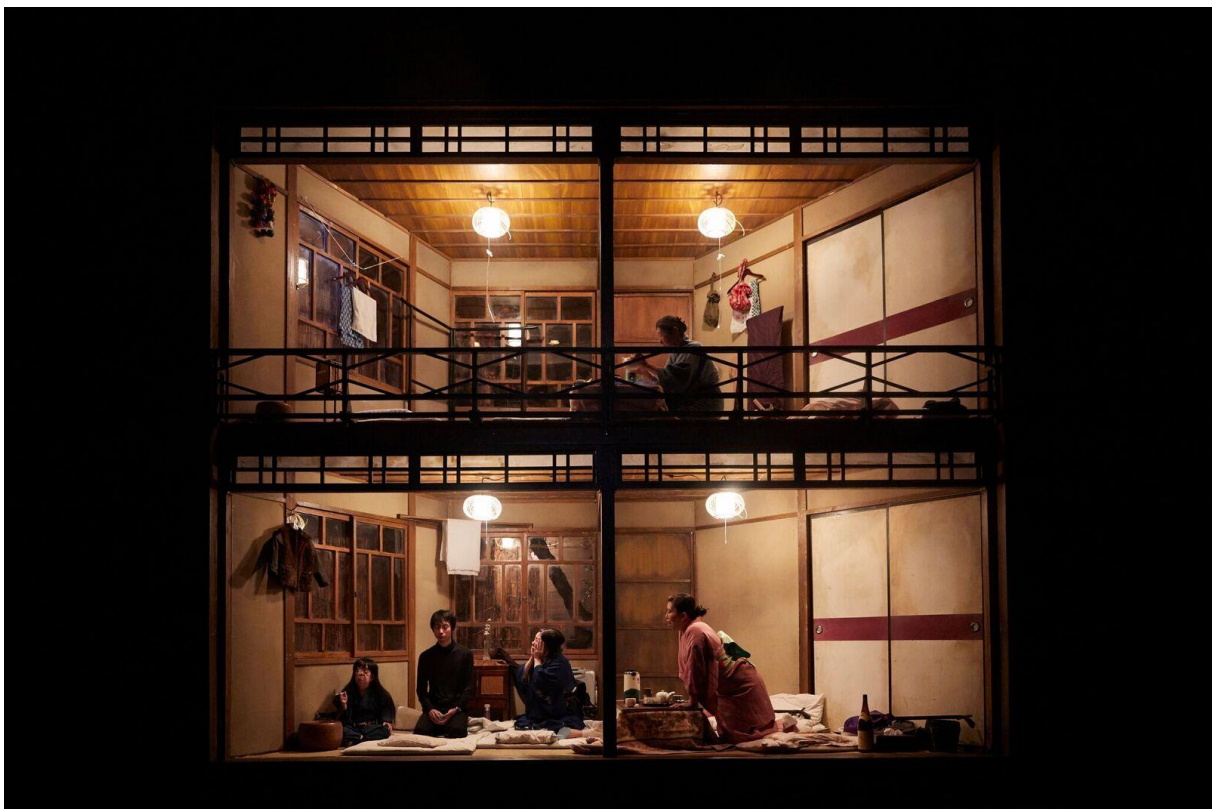
©Takashi Horikawa Photo :Japan Foundation

「ダークマスター」は大阪の、とある寂れた食堂の変わり者のマスターと、たまたまそこに立ち寄ったフリーターの若者が織りなす物語です。そのマスターは以前から食堂を誰かにまかせ、自分は引退しようと考えていました。マスターは、料理を何も作ったことのない若者に、(寂れているのにそんな余裕があるのはあり得ない設定ではあるのですが)食堂のあち

ここに設置してある通信機を通じて、一挙手一投足若者に料理の手ほどきをしていきます。通信機を通して聞こえるマスターの関西弁のセリフ回しと若者の最初はぎこちないが、急速に熟練していく様子が、絶妙なセリフの掛け合いでユーモアたっぷりに進展していき、やがて若者が、マスターと同じように次の若者にバトンタッチしかけるところで幕となります。

セリフの掛け合いだけでなく、登場する客の仕草や関西の食堂に貼られた長嶋茂雄のポスターなど小道具まで緻密に計算された舞台演出は見事でした。ただ、一か所、大金をばら撒く中国人客が金を受け取らない若者に暴力をふるう場面は、やや唐突感があり、挿入される意味、暴力の意味が観客に分かりづらいのではないかと感じました。

会館で公演したことがある「地獄谷温泉 無明ノ宿」については、今回は都合がつかず観劇できませんでしたが、晩秋の温泉宿で繰り広げられる泊り客たちの人間模様が非常に面白い劇です。回転する大掛かりな舞台装置にも度肝を抜かれます。ここに弊館のプロシユアに掲載した舞台の写真を転載しておきます。



「地獄谷温泉 無明ノ宿」のシーン ©Yurina Niihara Photo: Japan Foundation

② 野田秀樹演出「贗作 桜の森の満開の下」公演

9月28日から10月3日まで国立シャイヨー劇場で野田秀樹演出による「贗作 桜の森の満開の下」が上演されました。筆者は9月29日の公演を鑑賞しましたが、観客席には映画「万引き家族」でカンヌ映画祭のパルム・ドールを受賞した是枝監督の姿もありました。

筆者らが「ジャポニスム2018」の演劇会場を探していた時、シャイヨー劇場の芸術監督ディディエ・デシャンさんが、歌舞伎とともに野田秀樹さんの作品を是非上演したいと熱望したのが実現した形となりました。それほどの力の入れようでした。それに答えるべく、野田さん側も最高のキャスティングで臨みました。役どころは主演の妻夫木聡さんをはじめ、深津絵里さん、天海祐希さん、古田新太さんら演技力のある俳優で固めています。



野田秀樹演出「桜の森の満開の下」のパンフレット表紙
(上から天海祐希、深津絵里、妻夫木聡、古田新太)

物語は坂口安吾の小説「桜の森の満開の下」と「夜長姫と耳男」をもとに野田秀樹が脚色したもので、初演は1989年。セリフの中にダジャレや掛詞、現代日本のホットスポットを散りばめているので、日本語や日本を知らないフランスの観客にわかるかどうか、気になりながら時々フランス語字幕を見やりましたが、セリフのテンポが速いために、そうしたダジャレや掛詞をフランス語にすべて訳すのは至難の業で、実際、多くは意識されていませんでした。それでも、フランス人たちは俳優たちの仕草や声の調子でわかるらしく、ほぼ日本人と同じタイミングで笑ったり反応したりしていました。

満開の桜の美しいセットやそれに劣らず目を楽しませるカラフルな衣裳、そして伸縮自在な紐を使ってズームアップしたり仕切りを作ったりする手法など、観客の目を存分に楽しませてくれた2時間でした。満員の観客席からは感動の歓声と拍手が長い間続きました。

③ 「日本映画の100年」開会記念・無声映画「雄呂血」上映会

9月26日午後8時からシネマテーク・フランセーズで「日本映画の100年」第一部の初日を飾り、無声映画「雄呂血」が弁士と演奏付きで上映されました。

上映前に映画選定委員を務めたジャン＝フランソワ・ロジェ・シネマテーク事業部長、ファブリス・アルデュイニ弊館事業部次長(映画担当)、安藤紘平早稲田大学名誉教授・東京国際映画祭プログラミングアドバイザーの3人が挨拶をしたあと、弁士である坂本頼光さん、ギター&三味線の湯浅ジョウイチさん、フルートの鈴木真紀子さん、ピアノの杉本顕子さんが紹介されました。

物語は直情径行で頑固一徹、要領の悪い阪東妻三郎演じる下級侍が、同じく塾生の家老の息子にいじわるされて怒り、暴力沙汰を起こして破門となる。しかし、塾長の娘に恋焦がれていたため、彼は夜陰に乗じて塾長の家に忍び入り、娘に恋心を打ち明ける。すると、不意の告白に恐怖を感じた娘が悲鳴をあげたため、父の塾長が呼んだ捕りに御用となり入牢する。出牢後、牢内で知り合った小悪人の家に居候となるが、そこでも悪巧みに思わず加担することになって、また捉えられ、入牢出牢を繰り返す。最後には大勢の役人に取り囲まれて、数人を殺めて死罪となる。そういう不条理で救いようのない筋ですが、侍の弱さやチャンバラシーンのリアルさなどの描写は従来の歌舞伎などの演劇には見られなかったことで、黒澤明など、その後の映画監督にも大きな影響を及ぼしたと言われています。

なんとも不条理な終わり方について、安藤紘平さんは「日本の美意識の特色はピンク色を桜色、薄紅色、桃色といろいろな呼び方があるように“あいまいさ”と“多様性”にあります」と述べていました。

今回、筆者は生演奏と弁士を立てた無声映画を初めて見ましたが、映画の映像と弁士の活弁と音楽が三位一体となって、映画と演劇とコンサートを融合した映画とはまったく別の7.5次元アートのような新鮮な感動を覚えました。弁士の坂本さんの話では、日本には今プロとして弁士をしているのは5人ぐらいしかいないとのことですが、これを機会に再注目されていくのではないかと期待されます。

「日本映画の父」と呼ばれた牧野省三製作になる 1925 年の古い映画で、途中のフィルム交換がうまく行かず、5~6 分程度の映像の途切れがあった時も、音楽が演奏され続ける中、弁士のとっさの機転で「平三郎の心は暗闇の中へと落ちて行くのでした・・・」と言いながらそのオークワードな場面をうまく繕ったため、観客もまるでそれが一つの演出のように感じるほどに自然でした。映画だけの場合、このような間の持たせ方はできなかったのではないかと思います。



無声映画「雄呂血」上映会の前にあいさつに立つ映画選定委員の一人・安藤紘平さん



上映会後カメラマンの前に並んだ右から坂本さん、湯浅さん、鈴木さん、杉本さん

④ 渡邊守章「繻子の靴」講演会

若干日は遡りますが、9月25日18時から東京大学名誉教授で京都造形芸術大学舞台芸術研究センター前所長の演出家・渡邊守章さんによる講演会がパリ日本文化会館小ホールで実施されました。これは「ジャポニスム2018」大御所シリーズの第一弾としてポール・クロード生誕150年を記念して開かれた講演会です。クロードのお孫さんやクロード協会の会長など110人ほどの来場者が熱心に聞き入りました。

演題の「繻子の靴」はクロードの代表作です。それを、渡邊先生は原作に近い8時間バージョンに仕上げ、2016年12月に京都で、2018年6月に静岡で上演しました、その舞台演出について、ご息子の敦彦さんが撮影した映像を時々はさみながら、階段状の舞台や影を効果的に使った演出の意図や裏話等を見事なフランス語で解説しました。

講演後は聴衆が先生に挨拶したり、質問したり、ご著書にサインを求めたりするために、長い列ができましたが、先生は一人一人に丁寧に応じていました。

私事になりますが、筆者は渡邊守章先生の生徒の一人でもありました。クロードの『黄金の頭』をテキストにした授業は難しく、ついていくのがやっとでしたが、先生とは卒業後も縁があり、出張先のインドネシアのジャカルタの空港でばったりお遭いしたり、弊館が開館した頃に泉鏡花原作の『天守物語』を上演した際に担当であったり、先生が主宰する演劇集団「円」の公演を見に行ったりと、いろいろな接点がありました。今回、85歳になる先生を再び弊館にお迎えすることができ、大変光栄でした。



公演中の渡邊守章先生（左）

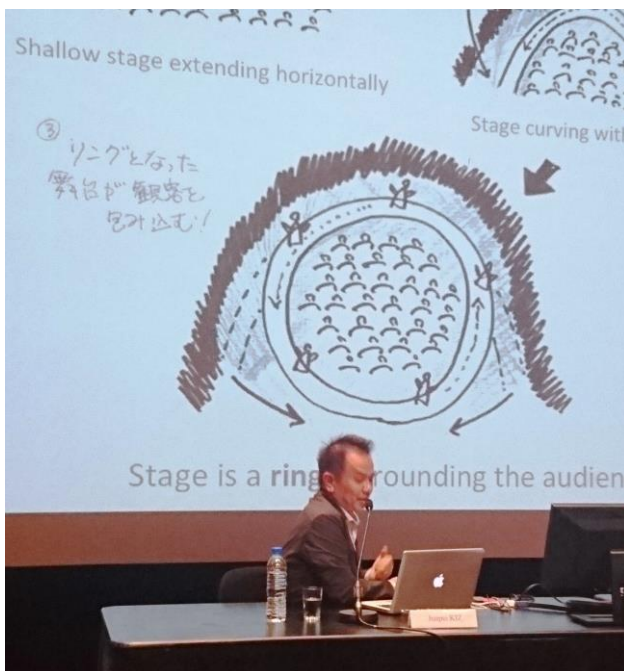
⑤ 木津潤平&宮城聡「Landscape Theatre」 講演会

さらに遡ること10日、9月15日18時から演出家宮城聡さんと、その主要舞台の空間デザインを担当している木津潤平さんの講演会がパリ日本文化会館小ホールで開催されました。

宮城聡さんは静岡県のSPACという劇場の芸術監督ですが、近年フランスでもっとも人気の高い演出家です。宮城さん演出の「アンティゴネ」は2017年のアヴィニョン演劇祭オープニング演目に抜擢され、アヴィニョンの法王庁の中庭で上演されて大絶賛されたほか、2014年にはアヴィニョン演劇祭でインドの叙事詩「マハーバーラタ」を馬蹄型の巨大な石切り場の跡地で上演し、2016年にはパリのケ・ブランリー美術館のレヴィニストロース劇場で民話を題材にした「イナバとナバホの白兎」を上演して拍手喝さいを浴びています。

2018年11月19~25日には「ジャポニスム2018」の一環として、ラ・ヴィレットで「マハーバーラタ~ナラ王の冒険~」を上演することになっています。同施設のフュジリ工館長による「是非に」との強い要望があったからです。

木津さんは2014年の石切り場での上演では客席を囲むループ状の高い舞台をつかって、舞台の奥行きをなくし、巨大な石切り場の壁の大きさに圧倒されないような工夫、2017年の「アンティゴネ」では法王庁の壁に役者の影を投影する形で、観客席から人間の小ささを感じられないように工夫したということです。いわば西洋の伝統的透視画法的舞台から離れて、日本的な平面的舞台にし、自然や町の環境をそのまま舞台に取り込むようなランドスケープ劇場という舞台空間づくりを心掛けているとのこと。今年の「マハーバーラタ」の舞台が楽しみになりました。



宮城聡演出の「マハーバーラタ」(左)と「アンティゴネ」(右)の舞台空間デザインを説明する木津潤平さん

⑥ 宮城聰演出「レヴェラシオン」公演

「ジャポニスム2018」の事業ではありませんが、9月20日から10月20日まで国立コリヌス劇場で長期公演している宮城聰演出「レヴェラシオン」を9月27日に拝見しました。原作はカメルーン出身の作家レオノーラ・ミアノ、舞台デザインはサラディン・ハティールです。2016年にコリヌス劇場の館長となったばかりのワジ・ムアワドさんが原作者ミアノさんに、彼女の作品を上演したいが、実現可能性は無視して、世界中の誰に演出をしてほしいか、と問いかけたところ、宮城さんの名が挙がったとのことでした。

原作は『ブルー3部作のレッド (Red in blue trilogy)』というタイトルで「レヴェラシオン (天啓)」「犠牲」「墓」の3部から構成されています。今回は第1部の上演でした。

物語はサブサハラアフリカと新大陸間の奴隷貿易に関わった、奴隷を送り出した人、仲介した人、受け入れた人たちの成仏しない罪深い魂たちが、「最後の審判」あるいは閻魔大王の面前よろしく、「インイ」という女神の前で自分たちの犯した罪を懺悔し、裁定を待つというもの。明示的にはアフリカとか奴隷とかいった言葉は出てきませんが、セリフを聞いているうちにそうであると観客には想像がつかます。

宮城さんは、原作者のミアノが、日本も含めて世界中の人々が、自分たちの国や祖先が犯した罪にどのように向き合うかという難題に、沈黙や単純な告発に陥ることなく、自らのペンとスタイルで勇氣溢れる回答を示しているとし、演劇人である自分の使命は、樂園に行けなかった、私たちの周りにはいる目に見えない彷徨える魂や霊を慰めることにある、と述べています。そして、救いとしての音楽の重要性を強調しています。

なお、主役の「インイ」の衣裳は縄文時代の土器や土偶からヒントを得たそうです。



「レヴェラシオン」の一場面 中央が「インイ」

©Simon Gosselin

以上